

かるうか、緋鬘是語の本まじり、
賀歌は算賀の時、大嘗会、歌合の時、その他多くの機

と思ふ。

源氏物語人物論

——葵上、六条御息所、紫上

玉鬘の形容詞的觀察——

稲 田 耕 子

源氏物語の女性（葵上、六条御息所、紫上、玉鬘）を形容詞により觀察した。考察の方法として、各人物に現れた形容詞を图表にし（表は略す）四人の女性の形容詞的特徴を論じて行くのであるが、それらを容貌、容姿の面と、性格、趣味を対象とした性格の二つに区分し、この二つの面から研究し、種々の形容詞がもたらす状態、挙動等について述べ、それらが形造る人物像は如何なるものであるかを検討したい。尙、論ずるにあつて、四人の女性の境遇を考へる時一応二つに分れて来る。即ち常識的に云つて、結婚生活が不幸に破綻をもたらした葵上、六条御息所、結婚生活が極めて幸福であつた紫上、玉鬘である。

① 不幸な結婚をした女性葵上

葵上は気品のある端麗な美しさを持つた人として誰もが指摘する様に、形容詞的觀察に於てもはつきり云える。即ち「気高し、うるはし」等の語がそれで葵上の容貌容姿に常に見受けられる。しかし葵上の美の本質は「うるはし」

的だと考えられているが、その相対立的立場にある「美し」が一例みられる。「後目に見おこせ給へるまみは、いと恥かしげに気高う美しげなる御かたちなり。」（若紫）この状態は源氏との会話の時の状態で、例文の後後から考えると決して可憐美などは考えられない。即ち「美し」は平安朝に於ては可憐美を含んだ一つの美を形造つていのである。流し目は源氏になされた状態で、流し目の持つ意味は可成りなまめかしさが含まれた状態である。しかるに流し目自身が生み出した美として、気品の高い美の反面、「美しげ」的美も含んでいたのである。こうした美的本質を持つ「美し」が葵上の容貌に現われている事は葵上を「うるはし」的美の持主と定義づけられない理由である。又葵上の病氣の状態にある容貌容姿は、健康な状態にある時の形容詞的表現とは相反した物が用いられていると云う事も、葵上の本質的な性格を生み出そうと考へる時最も注意せねばならない。「白き御衣に色合、いと花やかにて、御髪いと長うちちたきを引き給ひて、うち添えたるもかうてこそらうたげになまめきたる方添ひて、をかしかりけと見ゆ。」（葵卷）もその一例で、又一筋の乱れのない髪の状態を源氏は「ありがたし」と見て長い年月、何の不足があつて物足りなく思つていたのである。この様に病氣の為に現れた形容詞が、源氏の考へている理想的人物に、やゝ接近した葵上

であると云う事は、注意すべき点である。

次に葵上の性格について用いられている代表的形容詞は「気高し、うるはし」等で、「気高し」は、左大臣の一人娘としての気位の高さを現し、或は「例のうるはしう、よそほしき御様にて、心美しき御気色もなく苦しければ云々。」（紅葉賀巻）と、源氏が葵上に対して「心美しき人」であればと望んでいる様に葵上は「気高し、うるはし」の美の勝つた人で、その為に源氏との結婚生活がうまく行かなかつたのである。こうした事は左大臣の娘としての気位の高さ、即ち高貴な身分的意識に支配された後天的美として考へる。葵上の端麗美は又教養的に高い見識を持ち、それらは余りにも合理的であり、情熱をもやす事すらしな女性で、愛敬のない内攻的性格を作り上げたのである。

源氏との仲が打ち解けない原因ともなつている葵上の「あさまし、はしたなし」的行動は無意識の内に出たものではなく、可成り源氏に対する意識的なのが働いていたのだと考へる。

② 不幸な結婚をした女性六条御息所

六条御息所は、源氏物語に於て無類の妬婦といつた形で非難され、性格的にはつきりしたものを把握しかねる。所謂二重人格の持主と云われ、御息所の本質を探索するにあつて大きな疑惑に包まれた女性である。御息所の形容詞に現れた容貌容姿について述べると御息所が、夕顔との間

を嫉妬して物怪となつて現れた時の容姿を、又尼そぎにした髪の状態等を「をかしげ」で形容している。前者に於ける形容は、性格的に見られるみにくさがなく寧ろ「をかしげ」によつて御息所の容姿を象徴化し、最高のな美しさまでに高めている。この二例の外に「心憎し」がある。「心憎し」が現す御息所の容姿美は、重厚しい安定感のある奥ゆかしさがあり、慎ましさも含まれている。即ち「心憎し」は御息所の美のすべてを司るものと考えられる。御息所の容貌容姿は右にあげた三例にすぎず、必ずしもこれ等が御息所の容貌容姿を代表するものと決定づけられない様な気がする。とすると御息所なる人物の存在は、容貌、容姿の描写は問題でなく、源氏物語を構成するにあつて、性格的な描写のみを現そうとしたものであろうかとも考へられる。

御息所の性格を現す形容詞は、二つに區別することが出来る。一つは普通の状態にある時、他は御息所が物怪となつて現れる時である。前者に於ける御息所の代表的形容詞は、「恥かし、心深し」等である。これ等は常に控えめの態度であり、又気位の高さを現し、その反面慎しみ深さが加味されているのである。人間的に完成された「心深し」は、源氏の心を圧迫し、息苦しさを与えている。こうした事柄が源氏の愛情を一層遠いものにしてゐる。しかし御息所の源氏を思う心は、烈しいものであり、情熱的性格が物

に現れた容貌容姿について述べると御息所が、夕霧との間

怪となる原因でもある。一方「心深し」は源氏に苦痛を与える反面、御息所の情味深さを或は知的な面を豊富にしてゐる。即ち、趣味を対象とした性格である。御息所はこの趣味を対象とした性格によつて、紫上、玉鬘に見られる「なまめかし、今めかし」などの形容詞を生み出し、趣味深いあでやかな婦人として、或は筆づかいなどに理想的な美を發揮している。源氏と御息所の愛情の問題が直接破綻をきたす原因となつたのは、物怪である。「あさまし、むくつけし、疎まし」の形容は紫上、女三宮についた時の物怪で、源氏をして情ない気味の悪い物に思わせ、一層二人の愛情を遠いものにしてゐる。葵上についた物怪が源氏に交した言葉に「なつかしげに云いて云々」とあるが是は面白い現象と云うべきで、御息所の本質的な性格が潜んでゐるのではないだろうか。物怪は御息所自身不思議な自己分裂に陥り、激しい情熱は精神的に深刻な愛情の葛藤として自己反省を試みるが、どうにも押えられない苦悶の状態なのである。御息所の物怪の根本的な原因を深求するにあつて、考えられる事は、御息所の特異体質のみによる物怪でなく、そこには一夫多妻性もたらす当時の社会的な問題であり、御息所は当時の社会に於ける悲劇的女性の一人だと考えられる。

⑧ 幸福な結婚をした女性紫上

紫上の容貌容姿を、代表する形容詞は「美し、らうた

し、をかし」等である。「美し」は、紫上の主体的美であつて、「いみじう生ひ先見えて、美しげなるかたちなり」(若紫巻)と将来の育成を期待し、又「美し」は髪の状態、肌、乳房等に形容され、紫上の幼少美に止まる事なく、紫上の成長期、或は成長した様子、さらに死に至る迄「美し」は用いられてゐる。従つて紫上の美の本質を成すもので、元来紫上は愛敬のある明るい、可愛らしい人として論じられてゐる如く、形容詞的にみても、はつきりと証明出来る。「美し」と同じく可憐美を現す「らうたし」も数的に多いが、これ等は紫上の精神的悩みとか、病気の為衰えている時の状態などに著しい傾向をなしており、「美し」の明るさに対して、濕性を帯びた可憐美である。「美し、らうたし」的美を持つ紫上は源氏の絶対的愛情を得る一手段でもあつた。これに対して、「をかし」は紫上の円熟した時代に多く形容され、若宮を抱いてゐる姿、或いは母親としての趣きと落着きを現す場合、「をかし」美が用いられてゐる。「清ら」は殆んど髪形容に、当時の理想美と云われる「なまめかし」美、或は「今めかし」美も事欠いておらず、特に紫上の総合美と考えられる「めでたし」は結婚後に用いられており、この傾向は源氏の理想教育が、可成り強く影響をもたらしつてゐるものと考へる。紫上の性格を特徴づけているものは、「ありがたし、をかし、らうたし、美し、」等で、容貌容姿と相關連

した結果が出てゐる。性格に於ける「らうたし、美し」は逆に結婚後に多く用いられており、これらが紫上の、美的本質を成している事が一層強く証明される。「ありがたし」は紫上の行き届いた行動に、又趣味を対象とした性格に現れ、やはり源氏の理想教育によつて完全化された形容と見る。容貌容姿に現れた「なまめかし、今めかし」は主に趣味を対象とした性格に現れ、「なまめかし」が与えるあてやかさは、筆跡に、和琴の奏法に紫上独得な「今めかし」的性格を表している。紫上の「をかし」的性格は、源氏の理想教育以前の先天的美であり、自然に親愛感を覚える明るい性格なのである。「をかし」的性格がやさしい明るさを示す反面、理性的な紫上を勝気にしてゐる面がある。「さすがにしふねき所つきて、物怨じし給へるがなかなか愛敬づきて、腹立ちなし給ふを、をかしう見所ありと思す。」(濡標巻)紫上の嫉妬についての問題は、種々論じられてゐるが、右の例における明石上に対する嫉妬は、紫上自身、身分的優越感と明石上を、蔑視した態度が見受けられる。又紫上の源氏の愛を、他の女性に奪れまいとする競争心が生起する時、「らうたし」的性格に勝る「かどかどし」的性格が支配し、これらが源氏に煩わしいものを与えている。こうした二つの理由から、紫上を源氏物語に於ける理想的な女性として、定義づけられない事にする。

④ 幸福な結婚をした女性玉鬘

玉鬘の容貌容姿の特徴性は、「美し、をかし、清し」等である。まず「美し」は「酸漿とかいふめるやうにふくらかにて、髪のかかれるひまびま美しう覚ゆ。」(野分巻)と、玉鬘の丸くふくらんだ顔形に、或は肉付きがよく肥えている状態に用いられてゐる。玉鬘に於ける「美し」は紫上と同様、幼少の頃から持ち合せた美であり、それは源氏の娘として、六條院で華やかに生活する以前のもので、乳母夫婦と共に筑紫に下る時、玉鬘を粗末な舟に乗せて漕ぎ出す際の容姿を、「いと美しう」と乳母達がもらしてゐる。その時の「美し」的容姿は、玉鬘の境遇を一層あはれにしてゐる。その根拠として「美し」は父親から受けついで極めて自然性を有したものと推察出来る。玉鬘の「をかし」的美的形容は、容貌より容姿美に著しい傾向をなしてゐる。「をかし」の美的形容は可成り抒情豊かな場面に行われ、源氏が螢をはなつ劇的場面に於て、玉鬘の容姿を「いとをかしげなり」と云つてゐる。その反面常よりやつれた様子の時や沈んでゐる状態に於ても用いられてゐる。「清げ、清ら」も玉鬘の美的特徴を現すのに欠くべからざる存在を現し、それは髪が多くある状態よりも、髪の末が少くなつてゐる状態を「清げ」であると云い、その原因を恵まれぬ環境にあつた玉鬘の過去に求めている。玉鬘の美的理念である「清し」は所謂「美し」と同様都に出る以前

の美であつて、年輩に至つてもそれは衰えず、寧ろ「若う」を伴つてその優美性を保つている。玉鬢の容貌容姿美は、紫上と大變似通つてゐるのであるが、玉鬢には紫上に見られない個性美が添つてゐる。即ち「なつかし、今めかし、氣近し」であるが、それらは容姿美としてよりも性格的に著しい特徴性を有しているので、これらは性格の部類にて述べる。その他玉鬢に於ける「めでたし、ありがたし」は紫上の場合源氏の理想教育による総合美と考へたが極めて自然性を有したものである。

一方玉鬢に現れた形容詞は「らうたし、めでたし」の容貌姿に関連性を有しているものの外に容貌容姿にも見られたが、特に性格的に玉鬢特有の美として考へられる。

「なつかし、今めかし、かどかどし、氣近し」などがある。「なつかし」は玉鬢の性格を最も特徴づけてゐるものの一つで六例中、趣味を対象とした琴の爪音に「なつかし」があり、人なつかしさを与える玉鬢の氣質は、人の心を不思議にも引きつける。結局玉鬢の「なつかし」から推して考へられる事は、積極的にこちらから馴れ親しみたいと云う親愛感がこもつてゐる一つの個性美を形成してゐるものと考えられる。同じく親愛感を与える「氣近し」は、夕顔の性格と比較する事によつて玉鬢の客観的な親愛感を表してゐる。「今めかし」の性格は、玉鬢の個性美の一つであるが、単なる当世風に、とどまる事なく「氣近し」を伴つて

的理念である「清し」は所謂「美し」と同様に用ゐる上

いるのが二例、なまめかしを伴つてゐるものと、可成り、理知的な面を持ち趣味を対象とした「今めかし」では、風雅な心と共に花やかさがあり、賢明なみやびを解する態度が印象づけられる。又こうした反面非常に才氣に勝る「かどかどし」の性格も持つて居り、才氣の勝つた玉鬢は髭黒右大臣の奥方として世の人々から尊敬され、髭黒との結婚に於ても無分別な事はせず、自分の考へ一つで夫を定めたと云う非難を受けるような事はしないで済めた事など才氣のあるやり方として、源氏を感心させてゐる。玉鬢の「かどかどし」は意味的觀念から来る冷たさはなく、「氣近し」が伴つた親しさ、或は明朗感を有してゐる。玉鬢の性格で注目すべき点として、玉鬢が清潔な人として考へられたる根拠としての「心清し」である。「清し」の美的形容が主に容貌、容姿の形容に多く、玉鬢に於てはじめて性格に「清し」の形容が見られた事は玉鬢の性格的特徴として考へせられる。

結 び

① 葵上について

美的特徴は「うるはし、氣高し」で身分的環境がもたらす後天美とする。又葵上を「うるはし」の美的持主として定義づけられない理由として、「美しげ」が容貌にみられる事、病氣の爲通常とは相反した形容詞「らうたし、をかし、なまめかし」美がある事、この観点から、これらの美

は、「うるはし」的美に圧倒された内面的美で所謂葵上の精神美と考える。

② 六條御息所について

御息所の容貌容姿に於ける形容詞的美がはつきり擱めない事、通常の性格的特徴は、「恥かし、深し」で慎しさ、奥ゆかしさが一系列をなしている。性格を現す「深し」容姿を現す「心憎し」は趣味を対象とした性格に関連性を持っており、趣味を対象とした性格に於て理想的な美に到達している。又物怪としての「あさまし、むくつけし、ゆゆし」的性格は源氏の愛情を一層遠いものにしてしている。

③ 紫上について

特徴的美は、「美し、あうたし、をかし」である。「めでたし、ありがたし」は源氏の理想教育がもたらした、総合美で「めでたし」は主に容姿美に、「ありがたし」は性格描写に著しい傾向を示している。紫上の嫉妬は、源氏に煩わしいものを与え、源氏の愛は絶体的なものと考える紫上は、ある面では独占力の強い女性であると考えられるので、私は理想的な女性として定義づけられない。

④ 玉鬘について

特徴美は、「をかし、美し、らうたし」である。「なつかし、今めかし、清し」は玉鬘の独得的なものとして、個性美として定義づけられる。これらは、恵まれぬ境遇にある玉鬘を人間的に美しいものにし、六條院に於ける華やかな生

活に、順応しうるものを与えたのである。こうした玉鬘の美的特徴は自身自身を自省し、把握した上で自分の置かれた境遇に順応させ、調和させた結果であると考えられる。

(三十三年度卒業)

伊勢物語研究

— 三代集との関係に於いて —

筒井久子

伊勢物語は、常に和歌がその小説的場面を構成する重要な材料となつてゐるが、中心になる和歌を何からとつたかということや、その詞書が伊勢物語の文章とどのような関係にあるかということ、三代集との出典関係に於いて考察してみたいと思う。

△ 古今和歌集との関係に於いて

古今集は勅撰集であり、その詞書は簡潔であるのに、ただ業平の歌に限つて全体からみると、統一を破つて長い詞書をもつており、又、その詞書は伊勢物語の文章と多く違つていない点から、伊勢物語、或はその粉本ともいふべき業平家集と密接な関係にあるに相違ないという推定は、